

多様な異体字の水面下にあるもの

角 田 健 一 (大 塚)

TSUNODA Kenichi (Tajō)

それぞれの書体において異体字は存在する。しかしこの異体字は非常に煩瑣で明確な定義付けが困難である。新字体に対して旧字体、繁体字に対して簡体字など、仮に同じ文字を指しても関係性すら一定でなく難解極まりない。「字形が異なっても音や義など同一文字と捉えられるもの」程度の曖昧な定義に留めざるを得ない。

現在、私たちが日常使用しているのは常用漢字である。異体字は国語審議会が一九四六年に答申した当用漢字を皮切りに、最新である二〇一〇年常用漢字表の内閣告示によって整理されている。その常用漢字表（平成二二年内閣告示第二号）内閣訓令には「固有名詞を対象とするものではない」と明確に記されていることから、現代でも殊に固有名詞には異体字が散見される。異体字の使用者は同一文字でありながら、敢えて常用字体を用いず異体字を採用しているわけであり、その文字を一種尊重するような形で使用している、と捉えられないわけでないだろう。

異体字は篆書や篆書が主として用いられた時代や、楷書の発生、完成の時代以降とではやや性質が異なる。例えば甲骨文や殷金文、西周早期の金文の異体字は変遷上発生した異体字と明確に言えるものは少なく、字体標準化、普遍化の疎漏に起因する部位の構造の差異や、配置の逆転などが殆どである。漢字創成期という側面を考えれば当然であるが、字体そのものの確立が不安定、流動的な書体であることで発生する異体字といえよう。

これ以降の異体字は篆書から直接影響を受けているもの、書体変遷上で発生したもの等、複数要因がある。加えて同音同義の同一文字の中には複数の字形を持つ漢字は相当数あり、多くの研究者によってそれらが整理され、示されてはいても、同一見解と言えない解積もある。

ここでは簡単に稚作「出群之器」の「群」字、「器」字の二字について触れておきたい。「群」字の初出は概ね春秋戦国時代。篆書

羣

では現在のように左右の偏旁に分かれる文字ではなく、**羣**のように上下に部位が分かれる。周知の王羲之《蘭亭序》の一節「群賢畢至」に見える「群」字の如くである。左右に分かれる字形は後漢時代の漢碑《楊震碑》に至って漸く現れ、北魏時代になるとこの字形が半数以上を占めるようになる。これは隸書から北魏楷書の特徴でもある扁平な字形が少なからず影響しているように想像するが、《曹全碑》をはじめとする漢碑は、依然として上下の字形を主に用いていて詳しくはわからない。

北宋以降は行草書が盛んになるが、左右に分かれる現在の字形を好んで用いたのは米芾のみで、蘇軾や黃庭堅は篆書字形である上下の字形を多用している。元、明、清時代に見られる字形、特に草書に至っては上下に組み合わせる字形が殆どである。何れにせよ「群」字の異体字は、篆書直結型で篆書の結体か否かである。

対して「器」字はやや複雑である。稚作中の「器」字の中央に用いた形は「犬」部ではなく「工」部である。中央部は篆書の字形に準拠すると **器** で、もと「犬」であることはよく知られている。

この推移を安易に「犬」↓「大」↓「工」と連想できないわけではないが、実際には「犬」↓「工」へ直接推移している。図1は《嶽麓書院藏秦簡》に見られる字形である。中央部はまだ明らかに「犬」部を用いている。図2は《馬王堆帛書・老子乙本》で、これもまだ

縦の斜画が二本あり、「犬」部として認識することが出来るが、最終画で二本の斜画を貫く書き方になる。図3《馬王堆竹簡・遺策》では斜画は一本になり伸ばす形が現れるが、この字形は図4《睡虎地秦簡》にも既に似たようなものが確認できる。図5《居延漢簡》では、完全に「工」の形に推移している。

「器」字は「大」字の早書きによって出現する「工」、たとえば「因」字などとは発生の経緯が異なっている。後漢の漢碑に「器」字が散見されるようになった頃には、既に「犬」部と「工」部を用いる文字とが二分化されている状態で、楷書はこの影響をそのまま引き継いでいる。「犬」部と「工」部の異体の差異は、**変遷型**になる。「器」字の異体字は「犬」字を限られた範囲内で扁平に書写する上で発生したものであり、先述の早書きによって発生したものは異なるからである。

ではいったい「大」はどこから現れたのかといえば、はじめ触れた国語審議会が一九四六年に答申した当用漢字なのである。良く言えば整理された、悪く言えば安易に削られた一画である。そして発生時における字源の持つ意味をこの一画によって失ってしまった文字でもある。この問題については既に多くの指摘があるが、それでも私達は常用漢字に慣れきってしまった。言葉や文字は遷り変わっていくものと言えばそれまでだが、脈々と紡いできた漢字の変

遷を断ち切ってきた部分があるという事実は、常に心に留めておかねばならない。

図1



図2



図3



図4



図5



积文…出群之器

出典…世説新語

サイズ…一六〇cm×四〇cm



出群之器

160cm × 40cm